

第4学年 総合的な学習の時間学習指導案

奈良市立平城小学校教諭 村上 雄太

1. 単元名 地域の文化と日本の文化

2. 単元の目標

- 日本画の鑑賞や制作、墨づくり体験や作り手との対話を通して、その歴史的背景にある文化の有限性を理解し、未来へ継承していく責任感を持ち、地域の文化を紡ぐ担い手として、この知識を社会の中で働かせることができる。 (知識・技能)
- 日本画制作や墨づくりを体験する中で、素材や作り手など多様な視点から、技術や材料の有限性・価値を多面的かつ批判的に分析し、持続可能な文化継承のあり方を構想して、表現できる。 (思考・判断・表現)
- 地域の歴史が現代の日本文化に繋がっていることを自分事として捉え、文化を尊重する態度を基盤に、その継承に貢献したいという強い意欲をもって、探究を深め、主体的に行動しようすることができる。 (主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本単元は、児童が地域や日本の伝統文化の価値に触れ、自分たちの生活とのつながりを発見し、探究心を深めることをねらいとしている。そのために、地域にゆかりのある日本画家の上村淳之氏や錦光園の墨職人・長野氏、そして日本画制作やにぎり墨作りといった体験、奈良の伝統工芸品などを主な教材として扱う。

地域で活躍する人々の生き方や仕事への思いは、児童の学びを豊かにする生きた教材となる。日本画家の上村氏は、祖母・松園、父・松篁を継ぎ、平城小学校校区内にある自宅アトリエ（唎禽荘）で数百羽の鳥と暮らしながら鳥の絵を描き続けた。「鳥の画家」として知られ、文化勲章を受章している。その作品の一つは平城小学校の校長室に飾られており、なじみ深い。唎禽荘へは、第三学年の時、校区探検で行ったことある場所であり、本児童は、上村さんに出会ったことがあり、偉大な人物であるが身近に感じている児童も多く、難しい教材ではあるが日本画の製作過程や作品に興味をもつきっかけになるだろう。

奈良の老舗製墨所「錦光園」の長野氏は、伝統的な製墨技術を継承しつつ、その魅力を国内外に発信している。その姿は、伝統文化が現代に生き、未来へつながっていることを児童に実感させ、伝統を守り伝える仕事の価値や新たな挑戦の意義を学ぶ上で貴重な教材である。

さらに、知識として知るだけでなく、自らの手で体験し、五感で感じることは、文化への理解を本質的なものにする。日本画制作体験では、貝殻の粉である胡粉（ごふん）や膠（にかわ）といった天然の素材に直接触れる。薄く色を塗り重ねていく手間のかかる工程を体験することで、繊細な色彩や深みが生まれる背景を知り、作品鑑賞の視点を豊かにする。にぎり墨作り体験では、煤（すす）と膠を練り上げた「墨の素」を自らの手で握りしめ、世界に一つだけの墨を作る。手の跡が模様になる創造性だけでなく、完成までに数ヶ月かけてじっくりと乾燥させる時間を要する工程は、一つのもので完成するまでの作り手の労力や、道具を大切にすることを育む上で有効である。

これらの教材は、児童が地域や日本の文化の価値に具体的に触れ、自分たちの生活とのつながりを発見し、探究心を深める上で有効である。地域の人々との交流そのものが、児童の学びを豊かにする生きた教

材となり、郷土への愛着を育むことにつながると考える。

(2) 児童観

本学年の児童は、活動や体験を通して学ぶことに大きな喜びを感じる。特に、本単元で扱う上村淳史氏は、児童にとって特別な存在である。3年生のころに上村淳史さんと直接お会いし、町探検では自宅アトリエ（唎禽荘）で飼われている鳥たちにとっても興味を持っていたと聞いている。そして何より、校長室に飾られた鳥の絵は、上村淳史氏が、平城小学校のために寄贈してくれた絵であり、全校朝会のたびに目にしてきた、なじみ深い大切な作品である。

こうした心に残る体験があるからこそ、児童の中から「あの時の鳥が描かれている」「上村さんは、どうしてこの平城の地で絵を描き続けたのだろう」といった、素朴な問いが生まれてくるに違いない。その一人ひとりの気づきや感動こそが、本単元の学びの出発点となる。

一方で、それらの体験や知識は、点在している状態である。それらをつなぎ合わせ、地域の文化のすばらしさとして捉え直したり、その魅力を誰かにしっかりと伝えたりする力を育てていきたい。

そこで本単元では、児童のこれまでの体験を大切にしながら、新たな発見と感動を重ねられるように支援する。今年度関西で話題になった「大阪・関西万博」と意識した「平城万博」を開催し、自分たちの住む平城地域の魅力が再発見されることを期待している。

(3) 指導観

本単元では、地域にゆかりのある芸術家、上村淳之氏を切り口として、児童が自らの問いを基点に探究を進める学習を展開する。その際、以下の3つの観点を重視して指導にあたる。

第一に、児童の主體的な探究サイクルを確立することである。1学期「調べる・知る」、2学期「体験する・経験する」、3学期「まとめる・伝える・再確認する」という見通しをもたせる。導入では、児童の素朴な疑問や気づきを学習課題として設定し、自ら学ぶ意欲を高める。展開では、日本画制作や墨作り体験を通して得た実感的な学びを基に、地域の文化の良さや課題について話し合い、思考を深めさせる。まとめでは、成果を地域へ発信する「平城万博」を児童主体で計画・運営させることで、学びの深化を進める。

第二に、体験活動と振り返り・まとめを繰り返し、学びを質的に高めることである。松伯美術館やならまちでの「本物に触れる」活動で得た感動や発見を、単なる体験で終わらせない。国語科「工芸品のみりょくを伝えよう」と関連させながら、体験を言語化し、その価値や意義を多角的に考える場を意図的に設定する。これにより、地域の文化を自分事として捉え、その継承について考える態度を育成する。

第三に、教科横断的な視点から、総合的な資質・能力を育むことである。上村氏の生き方や作品に触れることを通して、社会科や図画工作科の学びを深める。また、調べたことを分かりやすく伝える国語科の力や、万博の計画に必要な算数的な思考などを働かせる場面を設定する。このように、各教科等の学びを相互に関連付けながら活用することで、多角的・総合的なものの見方や考え方を育む。

(4) ESD との関連

- 本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

有限性… 日本画や墨づくりといった地域の伝統文化は、職人の技術や自然からの原料がなければ成り立たず、何もしなければ未来には失われてしまう可能性のある、限りあるものであるということ。

責任性… 地域の文化が失われるかもしれないという課題に対し、それを他人事と捉えるのではなく、その価値と歴史を知った自分たちが、未来へ継承していく担い手としての責任を持っているということ。

相互性… 私たちが触れる地域の文化は、それ単独で存在するのではなく、自然環境、歴史、そして作り手の人々の思いが深く関わり合って成り立っており、そのつながりが未来の文化のあり方を決めるということ。

- 本学習で育てたい ESD の資質・能力

多面的・総合的に考える力

日本画や墨づくりといった地域の伝統文化を、作り手の思いや歴史、自然素材との関わりなど、多様な視点から捉え、その価値や課題を総合的に理解する。

批判的に考える力

伝統文化の継承が困難であるという現状に対し、「なぜ失われつつあるのか」「本当に未来に残すべき価値は何か」という問いを持ち、当たり前とされていることの本質を深く見つめ直す。

未来像を予測して計画を立てる力

文化の有限性という課題をもとに、このままでは伝統が失われる未来を予測し、地域の文化を未来へ継承していくための方策を自分事として構想・計画する。

- 本学習で変容を促す ESD の価値観

世代間の公正

自分たちの世代だけが地域の豊かな文化に触れるのではなく、未来を生きる子どもたちもその価値を等しく享受できるよう、責任を持って引き継いでいくことが大切である。

互いの人権・文化の尊重

地域に古くから伝わる文化や、それを支える作り手の人々の生き方も、皆かけがえのないものとして尊重しなくてはならない。

つながりを尊重する態度

地域の文化は、作品そのものだけでなく、それを取り巻く自然や歴史、人々との関わりといった、目には見えない「つながり」によって支えられていることを忘れてはならない。

- 達成が期待される SDGs

【4】 質の高い教育をみんなに

【11】 住み続けられるまちづくりを

【12】 つくる責任 つかう責任

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① 膠や煤など、自然の物質を使っていることを理解している。 ② 人の手で作られ技術が継承されていることを理解している。	① 日本画を描くことで、自然の素材を使っていることについて考えている。 ② 握り墨体験をすることで技術について考えている。 ③ 平城万博で、日本画や墨についての技術や材料の有限性・価値について、相手に伝わるように表現している。	① 三年生の学びとつなげて考えようとしている。 ② 平城万博で、未来に継承しようという思いをもち、主体的に行動しようとしている。

5. 単元の指導計画

段階	主な学習活動	・学習への支援	評価 (△)
導入 調べる・知る	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">「日本画家の上村さんってどんな人なんだろう？地域の文化って何だろう？」</div> <ol style="list-style-type: none"> 1. 地域にゆかりのある上村さんについて知り、学習課題を見つける。 2. 上村さんが館長を務めていた「松伯美術館」へ行き、実際の絵や日本画の書き方について学ぶ。 3. 上村さんや日本画について調べ、発表資料にまとめ、学んだことを共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上村さんの作品や資料を提示し、興味・関心を高める。 ・児童の問いを整理し、単元全体の学習の見通しをもたせる。 ・平城小学校の校長室にある絵と比べたり、喉禽荘で見た鳥の絵があるかを意識させる。 ・分かりやすくまとめるための視点（誰に、何を伝えたいか）を明確にする。・技法だけでなく、上村さんと同じように自分だけの鳥を描けるように声をかける。 	<p style="text-align: right;">△ウ①</p>
展開 体験する・経験する	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">「自分たちで地域の文化に触れてみよう」</div> <ol style="list-style-type: none"> 4. 日本画の技法を体験する。 日本画の技法で鳥の絵を描く。 5. ならまちに社会見学へ行き、にぎり墨作り体験や、なら工芸館の見学やならまち散策を行う。 6. 体験活動を通して感じたことや発見したことを振り返り、地域の文化の良さや課題について話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見るべき視点や問いをもって活動できるよう、国語「未来につなぐ工芸品／工芸品のみりょくを伝えよう」と関連させる。 ・体験を言語化し、価値を考えさせる。「この文化を続けるために大切なことは？」「自分になにができるかな？」 	<p style="text-align: right;">△ア① △イ① △ア② △イ②</p>
まとめ まとめる・伝える・再確認する	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">「学んだことを、地域の人に伝えよう！」</div> <ol style="list-style-type: none"> 7. 学習の成果を地域の人に伝えるため、「平城万博」の開催を計画する。 8. 「平城万博」を開催し、調べたことの発表や、体験で制作した作品の展示・体験会などを行う。 9. 「平城万博」の活動を振り返り、単元全体の学びをまとめる。地域の特徴をあらためて考え直し、地域の良さを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的意識をもって計画できるよう必要な準備物や役割分担、時間配分などを児童が主体的に考えられるようにする。 ・活動の成果と課題を児童自身が評価できるように、「なぜ、上村さんは平城地域に住んでいたのか」「古墳が近くにあるのはかんけいしているのかな」「秋篠寺ってあるね」など、地域の良さを再確認させる。 	<p style="text-align: right;">△イ③ △ウ②</p>

1. 指導のねらいと児童のふりかえりの分析

成果として、まずESDの「有限性」や「本物」への理解については、単なる知識の習得を超えた実感を伴う学びが実現した。特に、道徳科教材「君の家にも牛がいる」を通して画材である膠（にかわ）が動物の命から作られていることを学んだ上で、図画工作科での日本画制作に臨んだプロセスがよかった。児童は「日本画の絵の具や膠が、貝殻や動物の命といった自然物であること」に驚き、物質的な希少性と「命をいただく」ことの重みを記述していた。また、社会見学における墨職人・長野氏の指導による「にぎり墨体験」においても、墨の温かさや香りといった五感を伴う体験が、「二度と同じ形には戻らない」という不可逆性の理解へとつながっている。

次に「相互性」に関しては、職人や画家との直接的な対話が大きな効果をもたらした。児童は、長野氏の手作業による製墨工程や、上村淳之氏の作品に込められた思いに触れることで、手作業の価値を見出している。「手作業には作った人の心が宿る」「一つひとつに込められた願いがある」といった記述からは、技術の背景にある「人」の存在を強く意識し、作り手の思いを自分事として捉える姿勢が読み取れた。一方で、「なぜ上村氏はこの『平城』の地を選んだのか」という問いに対する理解が深まりきらなかった。「奈良の伝統文化」という広義の枠組みに留まり、「平城地域ならではの魅力」や「地域の歴史的背景」と結びつけた記述はあまりみられなかった。また、体験活動においては「にぎり墨が楽しかった」「意外と簡単だった」ということが中心になり、伝統を守り抜くことの厳しさや、後継者不足などの社会課題に対する分析・考察には至っていない。今後の指導における改善点になる。

2. 成果と課題（カリキュラム・マネジメントの視点から）

カリキュラム・マネジメントの視点から分析した本単元の最大の成果は、国語、図工、道徳、社会、算数といった多教科を、「平城万博」という最終的なアウトプットに向けて横断的に関連づけられた点にある。具体的には、1学期に社会科や総合的な学習の時間で地域探検や美術館見学を行い、上村氏や学芸員と出会うことで「知る」活動を展開した。続く2学期には、道徳科で生命のつながりを考えた上で、図画工作科で本物の画材に触れ、社会科で伝統工芸の職人と出会う「体験する」活動へと深化させた。そして3学期に、家族や地域へ「伝える」場としての「平城万博」を設定した。このように、教科の特質を生かしつつ時系列に沿って学びを積み上げたことで、バラバラになりがちな学びが「文化継承」という文脈の中で結びついた。

また、学校や地域にある人的・物的資産を効果的に教材化した点も成果である。校長室に飾られていた上村淳之氏の絵画を導入のきっかけとし、3年生時の地域探検の記憶を呼び起こしながら、地域の美術館や墨店（錦光園）へと学びの場を広げたことは、児童の既有知識と新たな学びを接続させる上で有効であった。身近な「人」や「もの」を教材の入り口としたことで、児童は地域の文化を遠い存在ではなく、「自分たちの町の物語」としてリアリティを持って捉えることができたのである。

今後の課題は、実践の持続可能性と系統性の確立である。現在の実践は、地域の人脈を持つ特定の指導者の熱量や力量に依存する側面が強い。今後は、協力が得られる地域人材や施設との連携ルートを整理し、カリキュラムを見直すなどして、組織として実施可能な「型」へと移行する必要がある。

また、カリキュラムの接続も重要な視点である。本単元で育まれた4年生なりの「地域文化への愛着」や「伝統への責任感」を、5・6年生での学習へどうつなげるかが問われる。高学年における世界遺産学習や平和学習においては、地域という視点から、より広範な歴史的背景やグローバルな課題へと視点を広げることが求められる。平城地域で培った文化継承への当事者意識を土台とし、持続可能な社会の創り手として、地域社会と協働しながら新たな価値を創造するような、より高度な社会参画のあり方を模索していくことが今後の展望となる。

第4学年総合的な学習の時間 「地域の文化 日本の文化」



2学期

日本画を描いたり、墨作りをしたり、地域の文化を体験しよう

現在の学年終了時に目指す姿

日本画家上村さんとの出会いから、地域の文化・日本の文化について調べ発表する中で、自分たちの住む地域に愛着をもち、多様な人々と協働してよりよい社会のための行動することが大切なことに気づき、行動できるようなる。

主に養いたいESDの資質・能力、育てたいESDの価値観

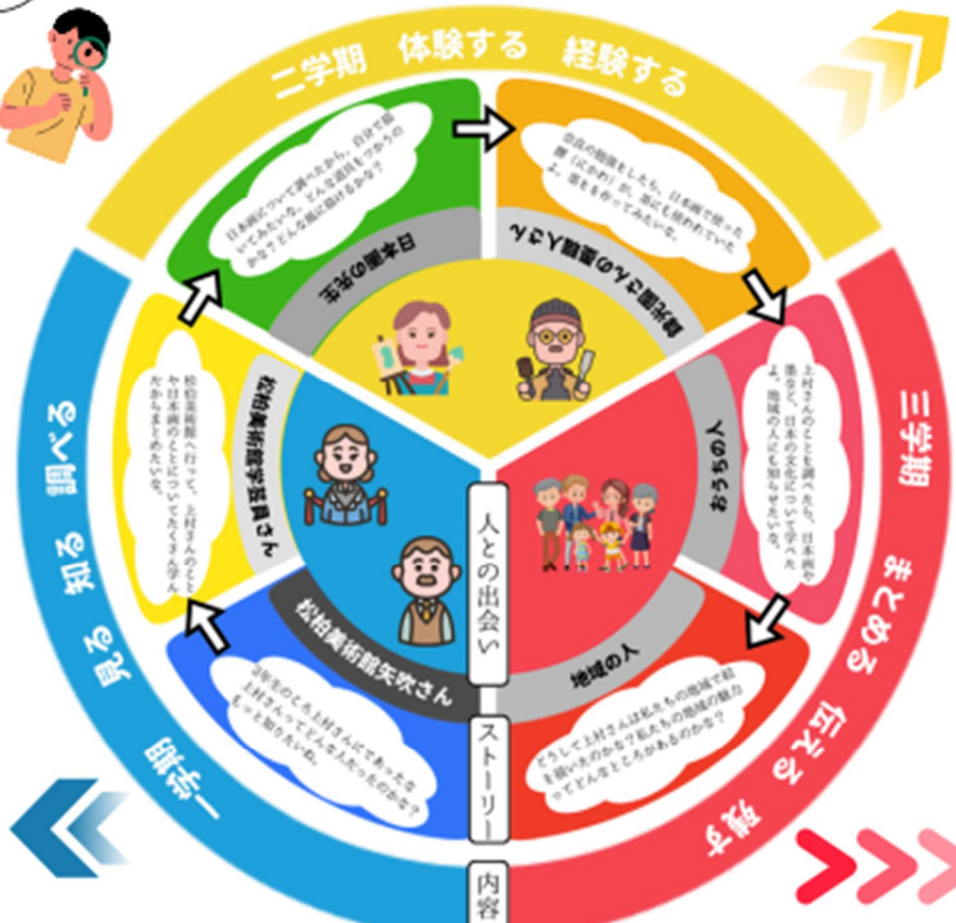
実際の社会や生活の中で生きて働く知識・技能	日本画の鑑賞や制作、墨づくり体験や作り手との対話を通して、その歴史的意義にある文化の有用性を理解し、未来へ継承していく責任感を持ち、地域の文化を大切に守り、この知識を社会の中で活かせることができる。
未知の状況にも対応できる思考力・判断力・選択力	日本画制作や墨づくりを体験する中で、素材や作り手など多様な視点から、技術や材料の有用性・価値を多面的かつ批判的に分析し、持続可能な文化継承のあり方を構想して、表現できる。
学んだことを人生や社会に活かそうとする「学びに向かう力、人間力」	地域の歴史が現代の日本文化に繋がっていることを自分事として捉え、文化を尊重する態度を基盤に、その継承に貢献したいという強い意欲をもって、探究を深め、主体的に行動しようすることができる。

1学期

3年生のころに出会った「上村さん」ってどんな人なのかを調べよう



	総合の学習	他教科の学習
ステップ1	三年生の総合の学習をふりかえる。上村さんは何をしていたのかな？	国語 「パンフレットを読む」の学習を通して、「書くこと」における
ステップ2	松伯美術館へ行って、上村さんの絵を見たり、日本画の絵について学ぶ。	1. 題材の設定、情報の収集、内容の検討 2. 構成の検討 3. 考えの形成、記述を、プレゼンテーション作成の中で意識させる。
ステップ3	松伯美術館で学んだことをまとめよう。	



	総合の学習	他教科の学習
ステップ1	日本画の技法を使い、絵を描く。	道徳 「君の家にもやががいる」を活用し、餅（にわか）について学ぶ。
ステップ2	奈良にはどんな文化があるかを調べる。	国語 「奈良につなぐ工芸品」で、日本の様々な文化に触れる中に、奈良の工芸品についても調べまとめる。
ステップ3	奈良町へ行き、にぎり墨体験を行う。	社会 「特色ある地いさと人々の暮らし」で、奈良の伝統工芸について調べまとめる。

3学期

学習してきたことを地域の人に伝える中で、文化と地域の良さを見つける。

	総合の学習	他教科の学習
ステップ1	いままでの学習をまとめ、「平城万博」を企画しよう。	算数 パビリオンを考える中で、概数や割り算を活用し、人数と体験時間を考えさせる。
ステップ2	「平城万博」を開催する。（参加日に地域の方を招待する）	音楽 日本の文化を紹介するのにふさわしい曲を選ぶ。
ステップ3	「平城万博」を通して、なぜ上村さんは、この場所で日本画を描こうと考えたかという問いから地域の良さを見つける。	社会 「きょう土の伝説・文化と先人たち」と、関連させ、私たちの地域の言語や神社に目を向け、地域の歴史に思いを寄せさせる。